氏　　名（本籍）	王　敬翔（台湾）
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 番 号	甲第 70 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	戦時中台湾における中国古典小説の翻訳に関する研究 （1939～1945）
論文審査委員	主査　愛知大学教授　黄　　英　哲
	副査　愛知大学教授　馬　場　　毅
	副査　愛知大学教授　松　岡　正　子

審査結果の要旨

本論文は、楊逵の『三国志物語』、黄得時の『水滸伝』、西川満の『西遊記』を中心に、戦時期台湾で出版された中国古典小説の日本語による翻訳作品について、それらが流行した時代背景と作品の特徴について論じたものである。また、戦時期台湾文学を語る上で、外すことのできない彼ら３人にそれぞれ中国古典小説の翻訳作品があることに注目し、当時の台湾における翻訳活動の意義を考察しようとする試みでもある。

当時、中国古典小説を題材とする読み物は台湾だけでなく日本本土においても流行していた。本論はそのブームの中、日本で出版された翻訳作品と、台湾で誕生した翻訳作品を対比させることにより、植民地台湾における翻訳作品の独自性について論じようとしている。これは、翻訳作品を原作の一部ではなく独立したひとつの文学作品としてとらえることによって、作品に込められた訳者の創作意図を探るという新しい観点からの台湾文学論でもある。

筆者は上述の３人の文学者による翻訳作品を取り上げるに当たって、なぜ台湾で中国古典小説を日本語に翻訳する動きが活発になったのかという問題を提起し、その背景に戦時期日本本土で中国古典小説の翻訳作品が流行していたことが影響していると分析する。そこでまず、日本における中国古典小説の翻訳の動きを、漢学が盛んであった江戸時代から掘り起こす作業を行ない、そもそも日本人が中国の古典作品に対してどのように接してきたかについて考証することから始めている。戦時期に入ると、中国古典小説は大東亜共栄圏の理念の下、「中国を理解する」ための窓口として次々と翻訳されるようになる。その代表が、吉川英治の『三国志』であり、これは日本のみならず台湾でも流行した。

第一章「楊逵『三国志物語』の翻訳改作をめぐって」は、楊逵の『三国志物語』を取り上げ、その執筆のきっかけとなったとされる吉川英治の『三国志』や、日本で流行していたその他の「三国志」の訳本と比較することにより、楊逵の『三国志物語』の特徴について明らかにしている。

楊逵について論究した論文は数多くあるが、本論は特に翻訳作品に限って論じている点に独自性がある。楊逵が作品のなかで隠喩した植民地体制への抗議と皮肉を、他の翻訳作品との詳細な対比により読み解くことで、彼の終始一貫した抗日意識を翻訳作品のなかからあぶり出すことに成功している。

それだけにとどまらず、楊逵が台湾人の日本語能力に合わせた言葉遣いで、原文にない比喩を多用したり、人物の個性を際立たせる描写によって物語を潤色しているのは、台湾の「大衆」に向けて発信するためであったと論じており、左翼作家としてのイメージが強い楊逵のもう一つの側面をも明らかにしている。

第二章「『水滸伝』の和訳における「信」と「達」の間の問題点－黄得時の翻訳を中心に」は、黄得時の『水滸伝』を和訳本の系譜の中で考察したものである。中国の代表的な古典小説はいずれも江戸時代以降に和訳が現われたが、なかでも『水滸伝』の訳本が最も多い。そのため、筆者は主に『水滸伝』の翻訳を中心に、日本における漢籍翻訳の流れを考察している。同じテキストから派生した訳本をもとに、時代の変遷とともに発生した翻訳の概

念と文体の転換がどのように表れているかを分析するとともに、訳者の背景や素養、さらには想定した読者による表現の相違や、内容の削除加筆の要因を考察している。

ここで翻訳の概念について、筆者は翻訳理論に関する先行研究をふまえつつ、翻訳は二つの言語体系の再構築に関わる活動であるから、翻訳する際には訳文と原文の間にズレが生じるのは当然であり、単に等価性を追求するのではなく、翻訳する目的と想定する読者にあわせて調整することで、目標言語に新しい要素がもたらされ、やがて新しい語彙や文体になるのだと説明する。翻訳の可能性について端的にまとめられている。また、翻訳の目的が「学術的」であれば、厳復が翻訳論においていうところの「信」に重きを置く傾向にあり、「大衆向け」であれば「達」に傾く可能性があることについても指摘している。筆者はその仮説に基づき、江戸時代からある『水滸伝』の翻訳作品それぞれを、翻訳された目的により二つに大別する作業を行なっている。その分類結果をふまえて、台湾の知識人である黄得時が戦時期の植民地台湾というコンテキストで執筆した『水滸伝』について、日本人の翻訳との異同を比較することで、夥しい和訳本のなかにおける黄得時作品の位置づけについて明らかにしている。

さらに、戦時期台湾人による日本語訳には「対内」と「対外」の意義を読みとることができることを指摘し、黄得時が日本語を用いて『水滸伝』を執筆した真意を明らかにしようと試みている。膨大な作品を丹念に読み比べることで為し得た論考といえる。

第三章は「西川満『西遊記』の翻訳改作をめぐって－在台日本人のまなざし」と題し、在台日本人の西川満が台湾において『西遊記』を翻訳したことの特殊性について論じつつ、台湾文学における西川満評価の比較分析にまで及んでいる。

筆者は、西川の『西遊記』翻訳の特殊性を２つ挙げる。ひとつは、西川満が日本人でありながら台湾で『西遊記』の翻訳をしたことである。当時、台湾や朝鮮といった植民地では、翻訳事業は地元の台湾人や朝鮮人が担うのが一般的で、在留日本人の参入はまれであった。西川満は台湾育ちで台湾の文壇で活躍した作家ではあるが、日本人による翻訳活動への参入はやはり特異な事例であったとする。

西川が翻訳をした動機は「支那の民族性」を知り、「支那良民の享くる幸福」のためであり、あくまでも日本文学の一環であったと分析されている。しかし一方で『西遊記』の出版元は台湾芸術社であり、この出版社は日本語能力が十分でない台湾人読者向けの本を出版することを方針に掲げていた。そのため西川の翻訳活動での参入は、やはり為政者の立場のように台湾人作家たちには見えたのではないかと筆者は指摘している。

二つ目に、当時の台湾人作家が敬遠しがちな神仙や妖怪の話があふれる『西遊記』を翻訳作品として選んでいることを挙げ、神仙故事は西川文学にとって重要な成分であり、西川の文学の趣味から考えれば当然であるとする。そして筆者は、西川についてまわる「エキゾチシズム」「芸術至上主義」「独善的」といった評価について、当時の台湾人作家からみれば、西川のロマンチシズムと高度な芸術性の追求は、ブルジョワジー的なスタイルであり、台湾人大衆の立場からは遠く、「遊戯」と見られても致し方ないものであったのであろうと分析している。本章において貫かれているのは、西川満の評価は、作品を通して客観的にとらえられるべきだという姿勢である。

第四章では、ひとつの原作について同時代に複数の翻訳作品が誕生している現象をとりあげ、『水滸伝』と『三国志』を例に検証し、この翻訳ブームともいうべき現象について台

湾独自の原因を探ろうと試みている。それらの訳本は翻訳作品とは言っても、意図的な改作や意訳がなされている作品が多く、その理由として筆者は、戦時下における厳しい検閲制度のなかで、日本当局に迎合した政策文学を執筆するよりも、翻訳によって中国と日本のかけ橋のような存在を装いながら、作中に自身の思想を隠喩するほうが得策であると考えられただからだとする。

また、台湾では言語統制によって、日本語の強要がなされていたものの、完全な日本語社会にはなっておらず、比較的易しい日本語で読みやすい作品に仕上げることも、その目的のひとつであったとし、それらは台湾の一般民衆のなかに文学の大衆化をひろめる役割をも担っていたと論じている。なお、論中には満州や朝鮮の事例を挟んではいるが、より詳細な比較をすることで、植民地言語統制下における翻訳文学の存在意義について、台湾における独自性をさらに見出すことができよう。

厳格な国策コントロールのなかで、当時の台湾人は日常生活においても常に「翻訳」を繰り返していたであろうと筆者は言う。彼ら３人は戦時下において彗星のごとく現われた二カ国語話者であったと形容する。論文は、そんな彼らが、中国語の原書で読むことができる中国古典小説をわざわざ日本語に翻訳する作業に次々と参入した原因と、その「台湾バージョン」の翻訳の中に作者が盛り込んだ真意について、戦時下日本における中国文化への興味や言語統制といった外的要因と、植民地化に対する台湾の作家たちの精神的抵抗といった内的要因の両面から考察を加えている。日台両地の膨大な作品を入手し、丹念に読み込むことで可能になった労作である。

望蜀の感ではあるが、本論文を出版する場合は、以下の点を改善することが望ましい。

１：楊逵や黄得時が中国古典小説の翻訳をはじめるきっかけは、吉川英治の『三国志』であったとしているが、そのどこに影響されたのかについての説明がやや希薄である。彼らに執筆の意欲を与えた吉川『三国志』の影響力についても分析がほしい。

２：朝鮮や満州での翻訳活動については中国の古典小説と関わるわけではないため、本論文では扱わないと筆者は前置きしているが、植民地言語統制下における翻訳文学の存在意義について、台湾における独自性を検証するためには、やはり両地の事例との比較が必要である。

３：戦時中台湾における「翻訳ブーム」ともいうべき現象について、筆者は言語統制により日本語の強要がなされていたものの、日本語識字率があまり高くなかったため、比較的易しい日本語で読みやすい作品に仕上げることが目的のひとつにあったとし、さらに文学の大衆化をひろめる役割をも担っていたと論じているが、はたしてその目的どおりに、これら翻訳作品が一般民衆に影響を与えることができたのかどうかという点の考察がやや不足しているように感じられた。

以上